

黒谷・岡ノ上遺跡

～ 県道小野藍本線歩道新設工事にかかる調査～

2003年2月

加東郡教育委員会

はじめに

加東郡東条町は『播磨風土記』にいう「端鹿里」にあたり、町の中央部を西流している東条川流域に開けた地域で、釣り針・鯉のぼりなどの地場産業のほか、酒米として名高い「山田錦」の産地としても知られています。

さて、本書で報告しています黒谷・岡ノ上遺跡は、室町時代後期の永禄七年に再建されました重要文化財の若宮八幡宮本殿の前面に広がる遺跡です。この中世期の本殿を眺めながら発掘調査で得られました成果をリンクすることで、地域に根付いた往時の生活景観などが呼び興されれば幸いです。

なお遺物・図面・写真といった貴重な資料は、可能な限りデジタル化を行い、保存・保管しておりますので、より多くの方々に手軽にご活用していただけることを切望してやみません。

最後になりましたが、発掘作業に従事戴いた(社)加東郡広域シルバ-人材センタ-の皆様、調査・整理作業にご指導・助言をいただいた多くの皆様方に深く謝意を表します。

2003年2月28日

加東郡教育委員会
教育長 前川公生

例 言

- 1 本書は、兵庫県加東郡東条町黒谷字岡ノ上周辺に広がる黒谷・岡ノ上遺跡の調査報告である。
- 2 調査は、兵庫県北播磨県民局 - 社土木事務所 - が行う県道小野藍本線歩道新設工事に先立ち、2002年度に発掘調査・整理作業を実施した。
- 3 遺物実測図・遺物観察表は、久保田寿恵が作成した。
- 4 遺構写真・遺物写真は、発掘調査・整理作業を担当した森下大輔が撮影し、編集・文責はすべて森下にある。
- 5 ラジコンによる航空写真は、(有)アムキ - に委託した。
- 6 写真フィルムのデジタルスキャニングはスタジオ fo に依頼した。
- 7 本調査で得られたすべての資料は加東郡教育委員会が保管している。
 - ・ 遺物はコンテナケ - スにて保管。
 - ・ 遺構図面及び遺物実測図はデジタルデータとしてCD-ROMで保管。

遺構・遺物実測図 - AutoCADLT2000i - dwg 形式

遺構・遺物写真 - jpeg 形式

遺構・遺物観察表 - MicrosoftAccess2000 - mdb 形式

凡 例

- 1 遺物実測図のうち土器類はS=1/3、石器・石製品は1/1、遺物写真はS=1/2を原則としている。
- 2 本書記載の遺物番号は、本文・図版・写真とも一致している。
- 3 遺物実測図の断面は、白抜き - 須恵器、塗潰 - 弥生土器・土師器、斜線 - 石器で表記している。
- 4 土壌・土器類の色調については、小山正忠ほか編『新版 標準 土色帖』を参照にした。
- 5 本書でいう方位は国土座標 - 系 - を使用し、基準高は東京湾基本海水位である。
- 6 本書では次のように略記している。
土坑 - SK 竪穴建物址 - SH 掘立柱建物址 - SB 溝 - SD ビット - P

* 竪穴住居址と呼称されている遺構について、掘立柱建物址に対応させ、本書では竪穴建物址と表現している。

目 次

本 文 目 次

はじめに	
例言	
位置と環境	
地理的概観	1
周辺の遺跡	3
調査に至る経緯	5
調査体制	5
調査の概要	
遺構の概要	6
遺物の概要	9
まとめにかえて	12
調査抄録	

図 版 目 次

図 1 遺跡位置図	図 10 SD-01
図 2 遺跡周辺等高線図	図 11 SK-01
図 3 周辺遺跡分布図	図 12 SK-02
図 4 調査位置図	図 13 C区遺構配置図
図 5 A区遺構配置図	図 14 SH-01
図 6 SX-01	図 15 SB-01
図 7 SX-02	図 16 SB-02
図 8 SX-03	図 17 出土遺物実測図
図 9 SX-05	

表 目 次

表 1 遺物観察表

写 真 目 次

若宮八幡宮本殿		写真 10 A区 SK-01
写真 1 A区 全景		写真 11 A区 調査風景
写真 2 A区 全景		写真 12 B区 全景
写真 3 A区 SX-01		写真 13 C区 全景
写真 4 A区 SX-01		写真 14 C区 全景
写真 5 A区 SX-02		写真 15 C区 SH-01
写真 6 A区 SX-02		写真 16 C区 SB-01
写真 7 A区 SX-03		写真 17 C区 SB-02
写真 8 A区 SX-05		写真 18 出土遺物
写真 9 A区 SD-01		

位置と環境

地理的概観

兵庫県加東郡東条町は小野市・三木市・三田市と加東郡社町・美嚮郡吉川町の3市2町に隣接する。町面積は約50.01Km²で大半は山塊と丘陵である。西流して加古川に注ぐ東条川沿いに段丘面や谷底平野が形成され、この部分が農地および市街化された人口7,584人(2月現在)の自治体である。

交通網としては県道小野藍本線が東条川に沿って延びているほか、中国自動車道兵庫東条インタ - チェンジの敷設により、京阪神間へのアクセスは良好な地域である。そのため、兵庫県下でも有数のゴルフ場が町域に点在し、別荘地としての開発も盛んである。また、農工業用水確保を目的に築かれた東条湖周辺にはレジャ - 施設が建築されている。基幹産業は農業であり、酒米として著名な「山田錦」の一大産地であるほか、釣り針・鯉のぼりなどの地場産業が営まれている。



図1 遺跡位置図

東条町黒谷地区の西側には神戸層群に起因する山塊が広がり、メタセコイヤ属やブナ科などの桂化木や葉の化石が産出することで著名な地点であったが、近年の乱獲でほとんど採取することが出来なくなっている。この神戸層群中の砂岩・泥岩が美囊郡吉川町から神戸市北区淡河にかけて広がり、地滑り地帯の主要因を成している。その上層には大阪層群が覆っている。北側には有馬層群に起因する凝灰岩の急峻な山塊が広がっており、東条町北部から社町北東部の地形が形成されている。黒谷地区はちょうど有馬層群と神戸層群の接点にあたる。

黒谷地区の東側には東条川が南流し、その両岸には河岸段丘が発達している。黒谷・岡ノ上遺跡は、この東条川右岸の段丘上に広がっている。

図2の等高線は、圃場整備事業後の水田高からコンタ - 派生ソフトを使って25cmの等高線を描いたものである。そのため圃場整備以前の地形図から読みとれる状況とはやや異にしているが、遺跡の南側には北西から南東方向に谷がみられ、この付近が遺跡の端部にあたるものと理解される。また、96m～95m付近には段丘崖が形成されており、この付近でも遺跡の範囲を限定出来そうである。なお、東側は東条川までが想定出来る。

上記の状態から遺跡の範囲は標高102mあたりから95mに広がり、東西約200m、南北約420m、面積は約80,000㎡が想定される。

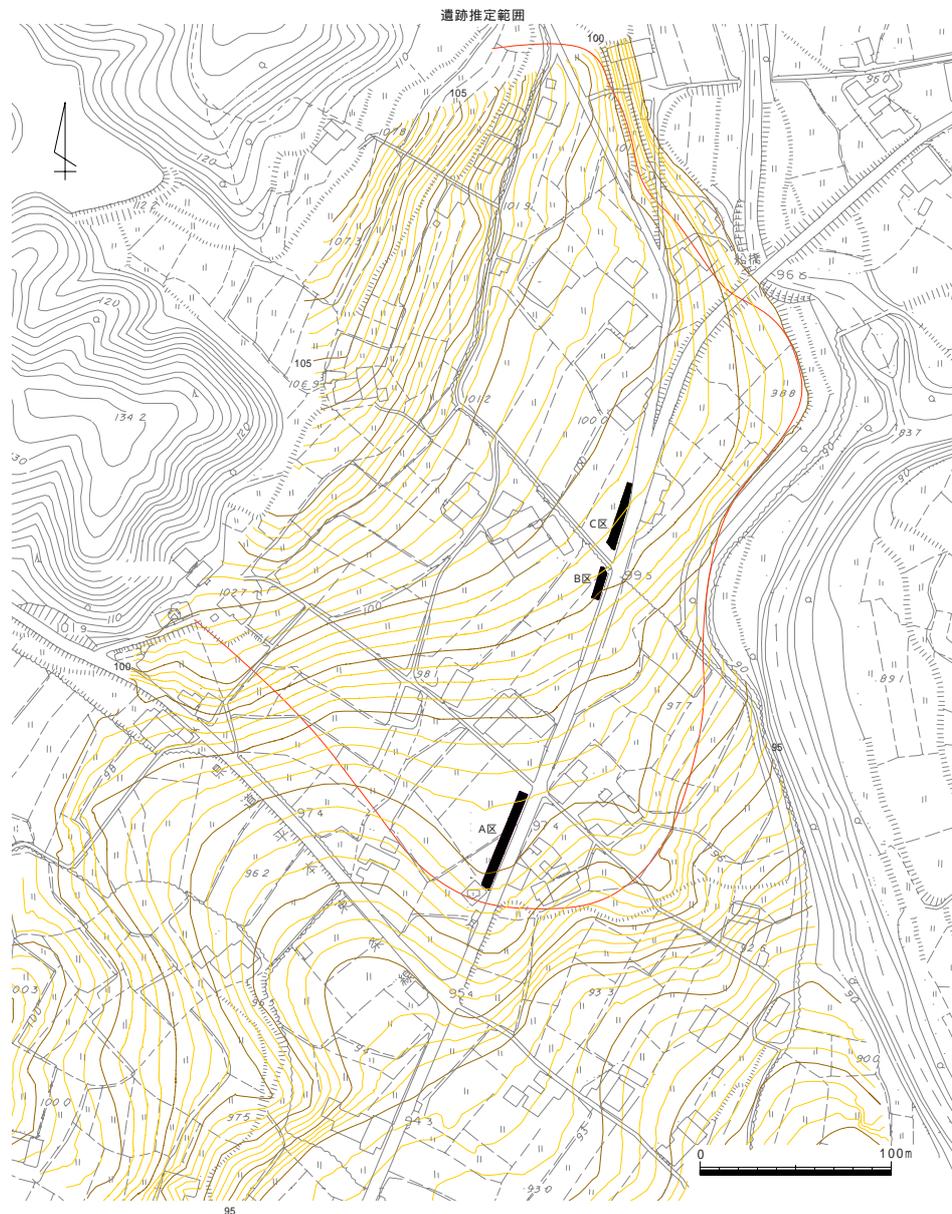


図2 遺跡周辺等高線図

周辺の遺跡

黒谷・岡ノ上遺跡周辺の遺跡を紹介することにする。

東条町で最古の遺跡は貞守地区に位置する三尾山遺跡で、縄文前期の土器類のほか、石鏃・石ヒなどが出土している。明治池遺跡、長貞・松原大池遺跡などでも同期と思われる石鏃などが採取されているが、いずれも東条川左岸に位置している。

弥生時代

黒谷・岡ノ上遺跡と同じ段丘面上に広がる袴鹿谷・松ノ下遺跡(4)では中期(古)の壺が出土しており、東条川流域では最古に属する時期の所産で、今後集落址などが確認されるものと思われる。中期には本書で報告する黒谷・岡ノ上遺跡(5)がみられる。平野部に目を移すと、竪穴建物址が検出されている中期の長谷・ワキカセ遺跡(2)、長貞・永町遺跡(6)などが知られている。後期後半には段丘上に森・番田遺跡(1)、平野部に袴鹿谷・東萩原遺跡(3)などが新たに形成される。袴鹿谷・松ノ下遺跡では炭化米が出土した竪穴建物址をはじめ、5基の竪穴建物址が検出されており、この地域では中心的な遺跡であろうと思われる。

古墳時代

森・番田遺跡や旧河道からヒノキ・モミ・ヤブツバキ・エゴなどの果実が出土し、周辺環境を復元する上で貴重な資料を提供している袴鹿谷・松ノ下遺跡、黒谷・岡ノ上遺跡などは前代から継続しているようで、新たに形成される遺跡としては黒谷・ナワテ遺跡(14)が知られている。

一方、東条町域で最古の古墳は、5世紀後半～6世紀初頭と思われる長井・経塚古墳(9)、長井古墳(10)、長貞古墳(11)が左岸の段丘上に散在している。6世紀末～7世紀になると岩屋古墳(7)、黒谷古墳(12)のように単独墳もみられるが、木棺直葬墳と横穴石室墳が混在する横谷古墳群(8)、横穴石室墳で構成され、東条町指定文化財の2号墳・3号墳を含む秋津古墳群(13)などの古墳群が形成されているほか、黒谷地区には黒谷古墳(12)が知られている。ほとんど崩壊しており、かろうじて横穴石室を内部構造とする円墳が1基だけが遺存している。

奈良時代

『播磨風土記』には「端鹿里」に比定されている地域で、遺跡としては段丘上に円面硯が出土している森・芝山遺跡(15)、銅製で黒漆塗りの蛇尾が出土した横谷・菊沢遺跡(16)、77m方角の寺域に法隆寺型の伽藍配置をもつ袴鹿廃寺(17)には2基の平窯跡が近接している。平野部には古家・堂ノ東遺跡(18)が知られている。

平安時代

前代の遺跡が継続されていると思われる、この時期に新たに形成される遺跡は知られていない。

鎌倉・室町時代

山城には、東条町域を見下ろすかたちで天神山城跡(26)、盃状穴が岩に掘り込まれている土井・城山城跡(30)がみられ、北・東に広がる社町域の三草山城址や清水寺などが一望できる。また、東条川沿いには岡本城跡・小沢城跡が点在している。

黒谷地区の山裾には鎮守社として今も地域を守り続けている重要文化財の若宮八幡宮本殿(28)がある。この神社は永禄7(1564)年に再建され、1967年に解体修理が行われた。手挟には牡丹・菊・鶴・亀・鯉、木鼻には枇杷・牡丹・桐・万年青・菖蒲・椿・柘榴などの彫刻が多彩で、これらを眺めるだけでも十分面白い。白鹿山袴鹿寺(27)は、袴鹿廃寺が崩壊した後に遷されたものと理解している。現在の伽藍は江戸時代の所産ではあるが、少なくとも中世的な様相を残しているほか、国宝の本堂をもつ社町朝光寺(29)の大般若經の校合が袴鹿寺經で行われ、応永13年に終了したことが奥書に記されており、この頃にはすでに立派な寺院が存在し、両寺院のあいだではそれなりの交流が行われていたことを示す資料であるといえよう。

・ 『重要文化財 若宮八幡宮本殿修理工事報告書』 重要文化財 若宮八幡宮本殿保存修理委員会 1968

・ 河村昭一 『社町史 第3巻 史料編1』 加東郡社町 P658-P660 2001

朝光寺大般若經 - 折本5 8 8巻が保管されており、県指定無形文化財である鬼追踊の際に転読されている。

社町指定文化財で、校合は応永10(1406)年に始まり応永13(1408)年に終了したことが奥書に記載されている。

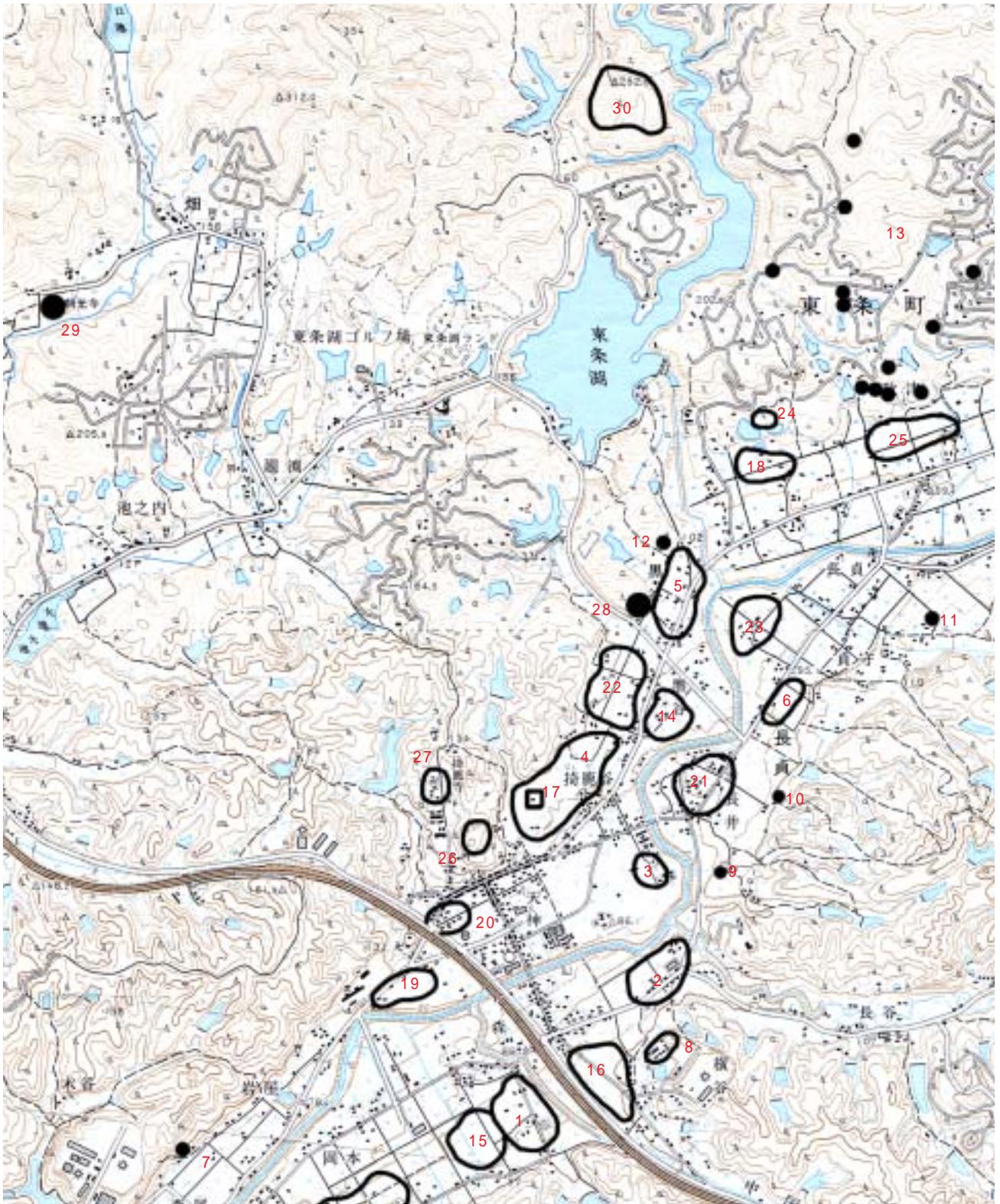


図3 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 1 森・番田遺跡 | 2 長谷・ワキカセ遺跡 | 3 掬鹿谷・西萩原遺跡 | 4 掬鹿谷・松ノ下遺跡 |
| 5 黒谷・岡ノ上遺跡 | 6 長貞・永町遺跡 | 7 岩屋古墳 | 8 横谷古墳群 |
| 9 長井・経塚古墳 | 10 長井古墳 | 11 長貞古墳 | 12 黒谷古墳 |
| 13 秋津古墳群 | 14 黒谷・ナワテ遺跡 | 15 森・芝山遺跡 | 16 横谷・菊沢遺跡 |
| 17 掬鹿麿寺跡 | 18 古家・堂ノ東遺跡 | 19 天神・戸坂遺跡 | 20 天神・松本遺跡 |
| 21 長井・遺跡 | 22 黒谷・大道ノ上遺跡 | 23 長貞・八ザコ遺跡 | 24 宮ノ上散布地 |
| 25 常田・上ノ木遺跡 | 26 天神山城跡 | 27 掬鹿寺 | 28 若宮八幡宮 |
| 29 朝光寺 | 30 土井・城山城跡 | | |

調査に至る経緯

兵庫県北播磨県民局 - 社土木事務所が県道小野藍本線の歩道敷設工事を実施し、その歩道拡幅部分に下水道管を埋設する旨の連絡が、東条町役場下水道課より加東郡教育委員会にもたらされた。この地域は2001年度の下水道管埋設に先行して実施した調査によって、周知の遺跡である黒谷・岡ノ上遺跡が広がっていることが明らかになっていたところから、拡幅部分についても調査が必要である旨を連絡していた。

その後、調査依頼および文化財保護法第57条3の提出が5月31日付であり、これを受けて6月4日より調査を開始し、6月5日付で文化財保護法第58条2項を進達した。なお調査は6月8日に終了し、6月9日に地元黒谷地区への説明会を実施した。終了時点で440㎡の調査面積である。

調査体制

〔事務局〕	教 育 長	前川公生
	教 育 次 長	神戸泰三
	生涯教育課長	岸本美佐雄
	課長補佐	登 光 広
	文化財係	森下大輔
		今 芳 也
		大橋公樹
	囑託	西本紀子
		久保田寿恵

〔現場作業〕 - アイウ・・・順(加東郡広域シルバ - 人材センタ - 派遣)

伊藤 賢	伊藤雅之	白井浩三	木村俊夫	小林 修	小林忠治	沢本佐登志
白国 豊	豊田久男	宮田照美	山下浩三			

〔調査担当者〕

森下大輔

〔整理作業〕

遺物復元	西本紀子
遺物彩色	尾辻かおり
遺構・遺物実測	久保田寿恵

〔作業協力機関〕

兵庫県教育委員会	調査指導
兵庫県北播磨県民局 社土木事務所	工事担当課
加東郡東条町役場 下水道課	調整
社団法人 加東郡広域シルバ - 人材センタ -	作業員派遣
株式会社 大林道路	重機掘削作業
スタジオ Fo	フィルムスキャンング

〔指導・助言等〕

国立兵庫教育大学	河村昭一		
京都府立大学	菱田哲郎		
兵庫県教育委員会	岡田章一		
小野市教育委員会	西田 猛	中西 信	
加西市教育委員会	立花 聡	永井信弘	森 幸三
西脇市教育委員会	岸本一郎		
中町教育委員会	宮原文隆		
加美町教育委員会	安平勝利		

調査の概要

遺構の概要

調査はA区 240 m²、B区 64 m²、C区 140 m²の3地点、総面積 444 m²を対象とした。

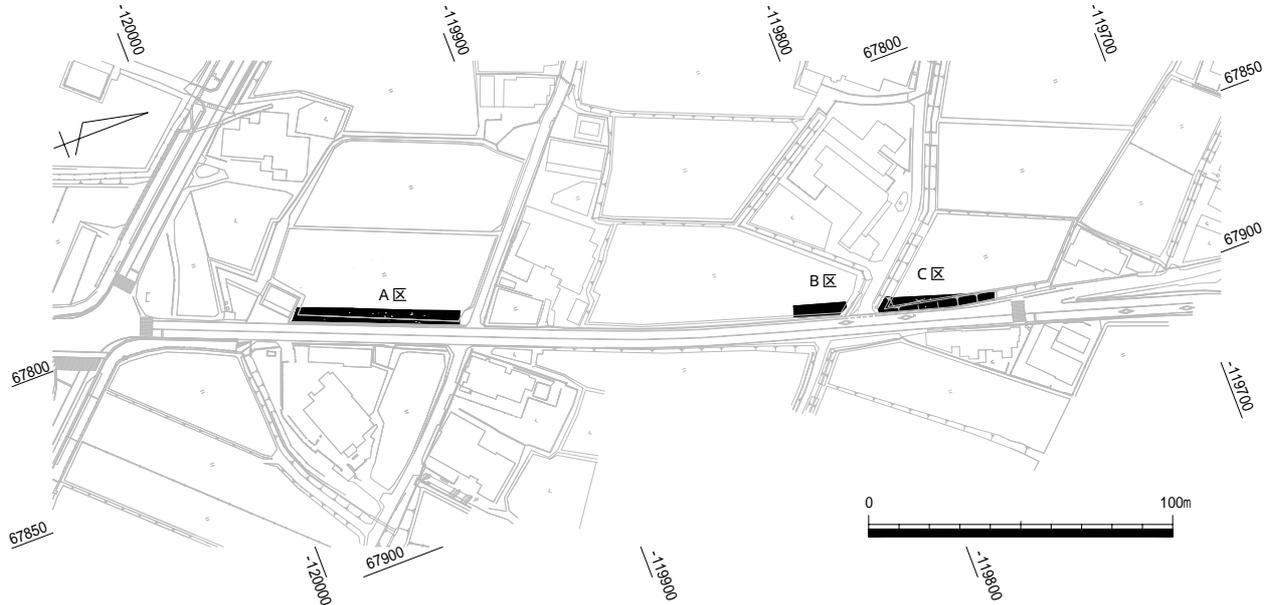


図4 調査位置図

A区

A区で検出された遺構には、弥生時代に属する円形周溝墓4基、方形周溝墓1基？、溝1条、土壇2基のほか、圃場整備前の水田境、電柱跡や圃場整備事業に伴う攪乱などがある。

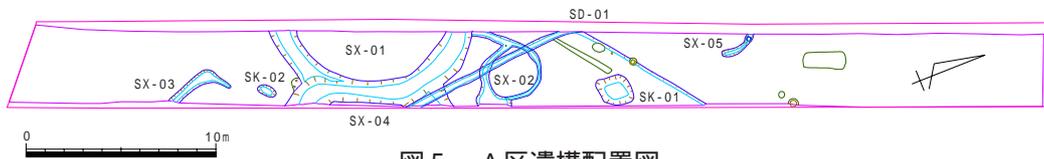


図5 A区遺構配置図

円形周溝墓(SX-01)

全容は明らかにできていないが、調査域から想定すれば、周溝の外側で径11.48m、内側では8.57mを測り、面積は周溝の外側では103.4 m²、内側では57.7 m²程度であろう。周溝幅は1.45mで、深さは北側から東側にかけては45cm～50cm、南側では30cmと浅いものの、断面はおおむね「U」字状の呈している。埋土は5～7cm程度の灰黄褐色砂質土が堆積した後、暗褐色砂質土が覆っている。東側は他の周溝墓(SX-04)と重なっているが、斬り合いは明らかにはできていない。

出土遺物としては、埋土からは壺の底部などがわずかに出土したほか、重量38.51gのサヌカイト片(6)が1点出土している。なお、削平のため主体部は検出されていない。

円形周溝墓(SX-02)

SX-01の北側に位置するもので、歪な円形プランを呈している。その規模は、周溝の外側で径3.08m、内側では2.58mを測る。面積は周溝の外側で7.74 m²、内側では5.23 m²である。西側にはSX-01と接合する溝が延びてい

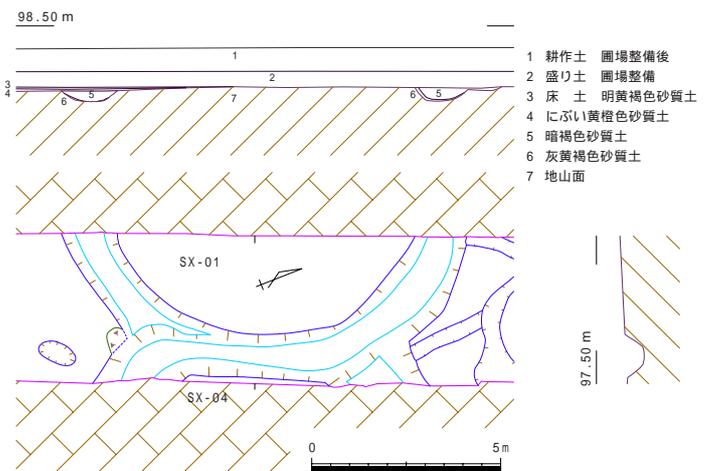


図6 SX-01

る。また、南側は他の遺構による掘方と接している。周溝幅は0.2m～0.35mで、深さは北側から東側にかけては8cmと浅く、埋土は暗褐色砂質土の単層である。断面はおおむね「U」字状の呈している。周溝内からサヌカイト製の石鏃(5)が出土している。遺存状況は悪く、主体部の痕跡は確認されていない。

方形周溝墓(SX-03)

SX-01の南側に位置するもので、北西部分で直角に折れ曲がる幅48cm、深さ12cm程度の溝が確認されている。埋土は暗褐色砂質土の単層、遺物は出土していないが、溝が直角に曲がることから方形周溝墓と理解した。

円形周溝墓(SX-04)

SX-01の東側の周溝を共有しており、大部分が調査地外の県道下に延びているところから、形状は判然としていない。周溝幅は1.8m～2.0m程度で、深さは北側で24cmと浅いが、南側では45cmが遺存している。埋土はSX-01と同様に下層に灰黄褐色砂質土が堆積した後、暗褐色砂質土が覆っており、先述したようにSX-01との軒り合いは判然としていない。

円形周溝墓(SX-05)

調査当初は溝と理解していたが、孤を描くように延びること、壺が横に倒れたような状態ではあるがほぼ完形品で出土したことから、円形周溝墓として紹介することにした。規模は周溝の外側で径3.47m、周溝内側では2.84mを測り、面積は周溝外側で9.45㎡、周溝内側では6.31㎡である。周溝幅は0.25m～0.35mで、深さは北側から東側にかけては7cmと浅く南に行くに従って途絶えている。SX-02に比して一回り大きい。ただ、壺が出土した部分は11cmとやや深く掘り込まれている。埋土は暗褐色砂質土の単層である。

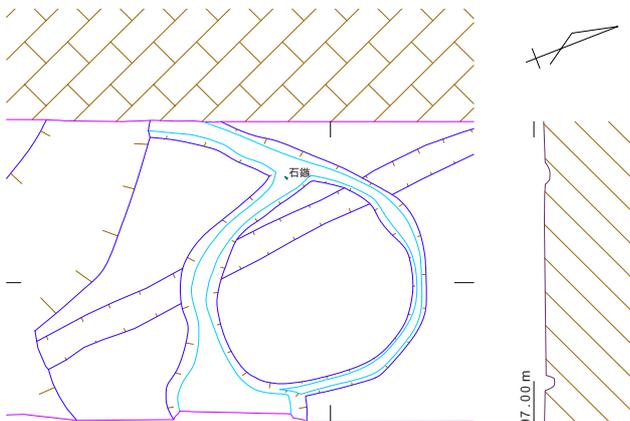


図7 SX-02

溝(SD-01)

溝はSX-01・-02・-04を切り込んで掘り込まれた幅35cm～40cm、深さ5cm程度と遺存状況は良くない。埋土はにぶい黄褐色-10YR4/3-の単層で、N-5°50'-Wとほぼ南北に築かれたもので、北側と南側の比高が17cmあるところから南流していたことが分かる。

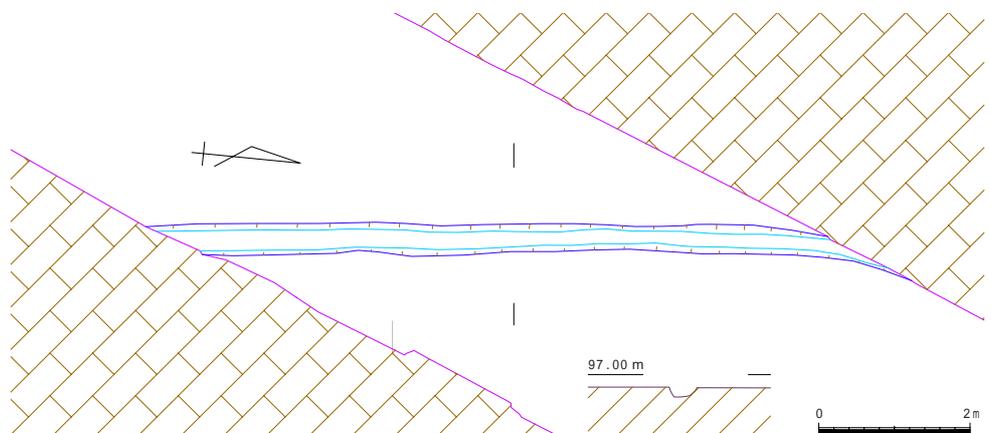


図10 SD-01

土坑1(SK-01)

SX-02とSX-05の間で確認された長径1.66m、短径1.6m、最深部で28cmを測る歪な方形のプランを呈したもので、面積は2.4㎡である。緩やかに「U」字状に掘り込まれており、底面の稜は判然としない形状である。

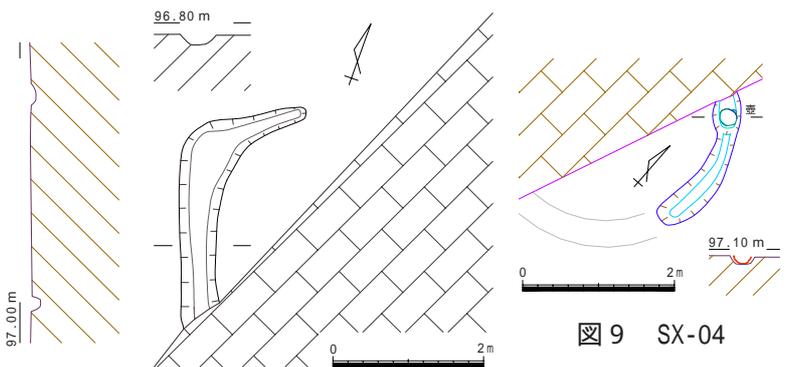


図8 SX-03

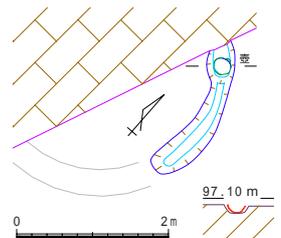


図9 SX-04

埋土は暗褐色砂質土 -10YR3/4- の単層で、遺物は出土しておらず、時期を明言することはできない。

土坑 2 (SK-02)

SX-01 と SX-03 の間に見られる長径 1.02m、短径 0.54m、最深部で 13cm を測り、面積は 0.44 m² である。プランは楕円形状を呈し、長軸を N-44° 41' -E とする。緩やかに湾曲しながら掘り込まれてもので、埋土は暗褐色砂質土 -10YR3/4- の単層である。遺物は出土していない。

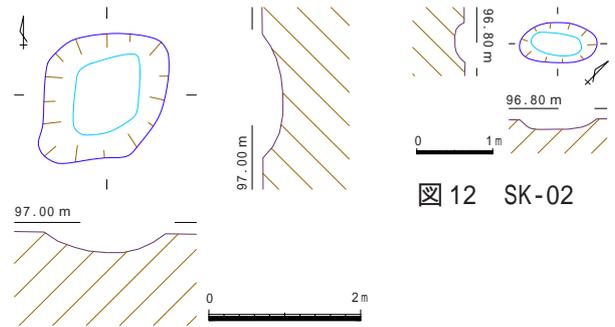


図11 SK-01

図12 SK-02

B区

B区は圃場整備事業により遺構面の削平が著しく、調査を放棄した。

C区

C区で検出された遺構には、弥生時代に属する竪穴建物 1 棟、室町時代の掘立柱建物 2 棟のほか、土坑 1 基、ピットなどが調査地の南側に散見するものの、北側は圃場整備に伴う攪乱が著しい。

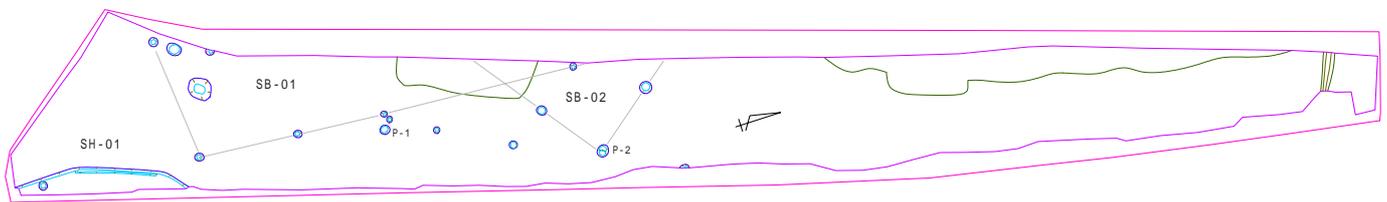


図13 C区遺構配置図

竪穴建物址 (SH-01)

調査地の南端部で現県道域に広がるような形で検出されている。一部だけであり、全容は判然とはしていない。径 9 m あまりで円形のプランを呈するものと推定している。面積は 64 m² 前後であろうが、現状では 2.28 m² が確認されているにすぎない。床面までの深さは 8 cm 程度と浅く、埋土は暗褐色砂質土 -10YR3/4- の単層

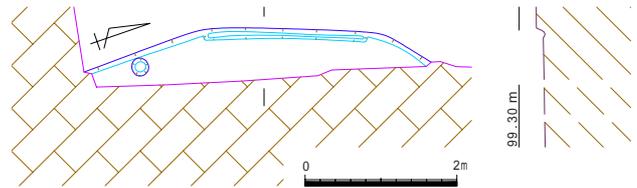


図14 SH-01

である。幅 9 cm 程度で最深部で 4cm 程度の周壁溝が一部に見られる。周壁に接する形で径 23cm、深さ 27cm のピットが検出されている。遺物は甕と思われる弥生土器の小片やサヌカイト片が数点出土しているに留まる。なお床面付近の土壌について、部分的に水洗を行ったが微少遺物の採取もできなかった。

掘立柱建物址 (SB-01)

南北 4 間 (10.14m) 以上、東西 1 間 (3.32m) 以上の建物で、一部の柱穴は圃場整備事業による攪乱によって削平されている。ピットは概ね径 20cm、深さは 10cm ~ 50cm と、ばらつきが大きい。長軸は N-3° 54' -E にある。

掘立柱建物址 (SB-02)

軸を N-53° 38' -E のもつ東西 1 間 (1.94m) 以上、南北 1 間 (2.80m) 以上の建物である。ピット径は 30cm 前後、深さは 18cm ~ 28cm が遺存している。出土遺物は、P-2 から須恵器の微細片や土埧片が出土したにすぎない。

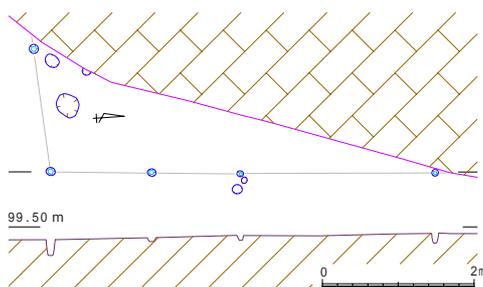


図15 SB-01

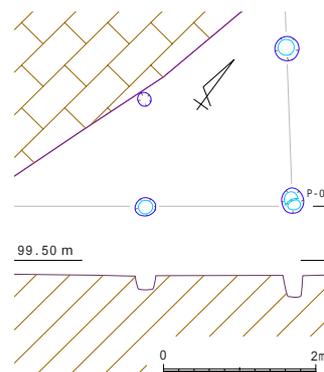


図16 SB-02

遺物の概要

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナケ - ス 1 箱に満たない。弥生時代の壺・甕、石鏃・サヌカイト片、須恵器の捏鉢・椀・皿、土師器の土釜・土埴、丹波焼の甕？、青磁皿がある。

出土遺物が少量であるところから図化しえたのはわずかに12点である。

A区

SX-01からは壺・甕の底部、サヌカイト片、SX-02からはサヌカイト製の石鏃、SX-05では壺が出土しているほか、包含層より須恵器の捏鉢・椀、土師器の土釜・土埴、丹波焼などの遺物がみられる。

C区

SH-01からは甕？・サヌカイト片、SB-02からは須恵器片・土師器の土埴が出土しているほか、須恵器の捏鉢・椀、土師器の土釜もしくは土埴、青磁の皿などが包含層から出土している。

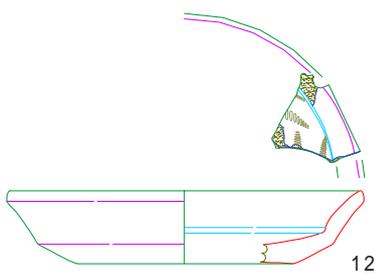
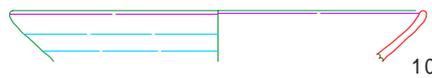
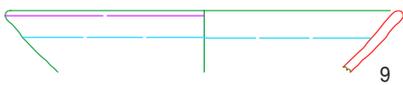
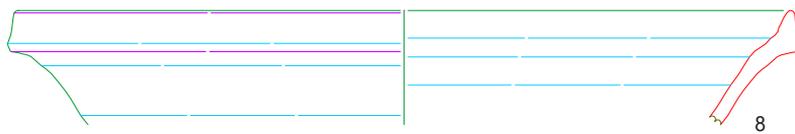
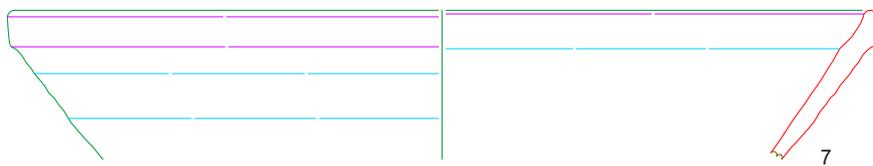
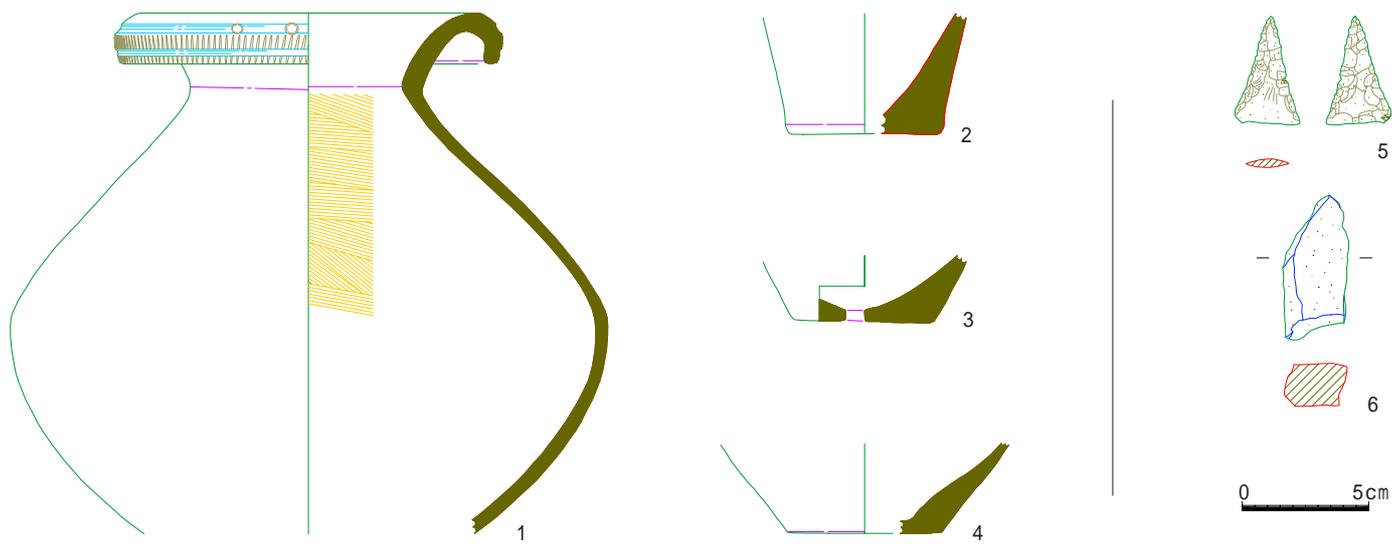
1は、SX-05で出土した弥生時代中期（古）に併行する壺である。口径13.2cm、器高20.7cm以上を測る。口縁端部には2条の凹線文を巡らせ、刻目文が付加され、現状では2個一対の円形浮文が貼り付けられている。取り上げ当初は、胴部上半に櫛描きの直線文と波状文がわずかに看取されたものの、現在では外面の器壁が剥落しており、施文や調整は全く看取されないところから図化は行っていない。内面の上半部には刷毛目がみられる。下半部はヘラケズリであろう。色調は灰白色～にぶい黄橙色を帯びている。2は底径5.9cm、器高4.7cm以上を測る。色調は橙色～にぶい黄橙色を帯びている。3は底径5.4cm、器高2.6cm以上を測る。淡黄橙色を帯び、底部中央には径7mmの穿孔が施されている。4は底径6.0cmを測り、器高は3.5cmが遺存している。色調は灰白色～灰色を帯びている。2～4は共に壺の底部であろう。1～4の弥生土器の胎土には1mm程度の石英・長石・チャートや凝灰岩が1cmあたり1～2個含まれているが、火山ガラスは認められない。

5はSX-02より出土したサヌカイト製の石鏃で、全長4.3cm、幅2.5cm、重量3.42gを測る。6はSX-01より出土した全長5.9cm、幅2.5cm、厚さ1.7cm、重量38.51gを測るサヌカイト塊である。

7は捏鉢で、口径34.0cm、器高5.9cmを測る。口縁部は上方に摘み出されもので、色調は灰色を帯びている。使用により内面がよく摩耗している。8の捏鉢は口径30.6cm、器高4.5cm以上を測り、色調は灰白色を帯びている。口縁端部はより三角形を呈している。これらはの捏鉢は、魚住18・21・22号窯に類似するところから13世紀前後の所産であろう。9は口径15.4cmの椀で器壁が薄く、灰白色を帯びている。10は口径16.3cmを測り、体部が内弯するところから皿と考えたが、椀の可能性も否定出来ない。時期的には13世紀～14世紀の所産であろう。11は回転糸切りされた椀の底部である。

12は外反して立ち上がる部分に稜をもち、口縁部は上方に摘み出された皿である。内面底部には櫛描された雷光文が施され、一条の凹線が巡らされている。その後全面に明オリ - ブ灰色の施釉が施され、外面底部を削って仕上げる同安窯系の青磁皿で、概ね13世紀代前半の所産であろう。

- ・ 兵庫県教育委員会『魚住古窯跡群』兵庫県文化財調査報告書 第19冊 1983
 - ・ 明石市教育委員会『魚住古窯跡群発掘調査報告書』1985
 - ・ 森田 稔 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」 - 神出古窯址群を中心に -
『神戸市立博物館研究紀要 第3号』神戸市立博物館 1986
- 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 岡田章一氏のご教示を得た。



0 10cm

图17 出土遺物実測図

番号	種別	器形	遺構名	口径	外面色	砂粒径 (mm)	石英	長石	チャ-ト	凝灰岩	調整	紋様	備考
				器高	内面色	砂粒数 (/cm)							
				底径									
1	弥生土器	壺	A区SX-05	13.2	灰白色～ にぶい黄 橙色	1					外面 - 内面 - 胴部刷毛 ヘラケズリ？	外面 - 口縁部 に刻目文 円 形浮文 胴部 に波状文？	
				20.7	にぶい黄 橙色	1							
2	弥生土器	底部	A区SX-01		にぶい黄 橙色	2							
				4.7	にぶい黄 橙色	3							
				5.9									
3	弥生土器	底部	A区SX-01		浅黄橙色	2							
				2.6	浅黄橙色	2							
				5.4									
4	弥生土器	底部	A区SX-01		灰白色～ 灰色	1							
				3.5	灰色	2							
				6.0									
5	石鏝		A区SX-02	全長4.3cm 幅2.5cm 厚さ3.4mm 重量3.42g								サヌカイト	
6	石片		A区SX-01	全長5.9cm 幅2.5cm 厚さ1.7cm 重量38.51g								サヌカイト	
7	須恵器	捏鉢	A区包含層	34	灰色						外面 - 横ナデ 内面 - 横ナデ		内面はよく 擦り減って いる
				5.9	灰色								
8	須恵器	捏鉢	A区包含層	30.6	灰白色						外面 - 横ナデ 内面 - 横ナデ		
				4.5	灰白色								
9	須恵器	椀	C区包含層	15.4	灰白色						外面 - 横ナデ 内面 - 横ナデ		
				2.4	灰白色								
10	須恵器	皿	C区包含層	16.3	灰色						外面 - 横ナデ 内面 - 横ナデ		
				2	灰色								
11	須恵器	椀(底部)	C区包含層	1						外面 - 横ナデ 底部回転糸切り 内面 - ナデ			
				5.1	灰白色								
12	青磁器	皿	C区包含層	13.8	明オリー ブ灰色						外面 - 横ナデ 内面 - 横ナデ	櫛描	外面、内面 に釉薬施す
				2.9	明オリー ブ灰色								
				8.7									

表1 出土遺物観察表

口径 / 器高 / 底径 単位 : cm アンダ-ラインは実数

まとめにかえて

調査によって、黒谷・岡ノ上遺跡は、弥生時代中期後半に初源を見ることが明らかになった。A区は円形周溝墓をはじめとした墓域であった可能性が強い。C区では円形の竪穴建物址がみられ、この付近までは弥生時代の集落域であることが明らかになっており、集落の範囲は図2で示した東西200m、南北420mの範囲と考えてよいものといえる。

近隣の同時期の遺跡には、約1km南の同じ段丘面上に位置する袴鹿谷・松ノ下遺跡があるほか、東条川を隔てて約700mの平野部には長貞・永町遺跡がみられ、これらの諸遺跡と有機的な関係を持ちながら維持されてきたものといえよう。

古墳時代では、前回の調査によって竪穴建物址が検出されているが、今回の調査では明らかにできず、遺跡の範囲を想定することはできていない。

奈良・平安時代に属する遺構・遺物は検出されておらず、集落が形成されているのかどうかの判断はできない。

鎌倉時代になると、図17に示したような包含層資料がみられるところから、遺跡が広がっていたものと理解され、その範囲は弥生時代の集落が地形的制約によって規定されているのと同程度の広がりが考えられる。

室町時代になるとC区で掘立柱建物柱が検出されたほか、前回の調査である下水道事業にかかる調査でもピットや薬研堀状の溝などが確認されているほか、ほぼ黒谷地域全域に遺物が散布しており、集落が形成されていることは明らかであり、永禄7年に再建された鎮守社としての若宮八幡宮もみられる。

遺物は決して多くはなく、特記すべきものはみられないが、弥生時代中期後半の壺が出土したことで、北摂地域である三田市域の遺物と比較する資料の一端がえられた意義は大きいといえる。



イノシシ



瑞雲



ゾウ



ショウブ



ピワ



オモダカ



A区 全景 北上空より



A区 全景 北上空より



A区 全景 東上空より



A区 全景 西上空より



A区SX-01 上空より



A区SX-01 北より



A区SX-01 北より



A区SX-01 南より



A区SX-02 上空より



A区SX-02 北より



A区SX-02 北より



A区SX-02 南より



A区SX-02 東より



A区SX-02 石鏝出土状況 東より



A区SX-03 上空より



A区SX-03 西より



A区SX-03 東より



A区 SX-05 東より



A区 SX-05 北より



A区 SX-05 東より



A区 SX-05 西より



A区 SX-05 南より



A区SD-01 上空より



A区SD-01 南より



A区SD-01 北より



A区 SK-01 南より



A区 SD-01 北より



A区 調査風景 北より



A区 調査風景 南より



B区 全景 北より



B区 全景 西より



C区 全景 南より



C区 全景 西より



C区 全景 南より



C区 全景 北より



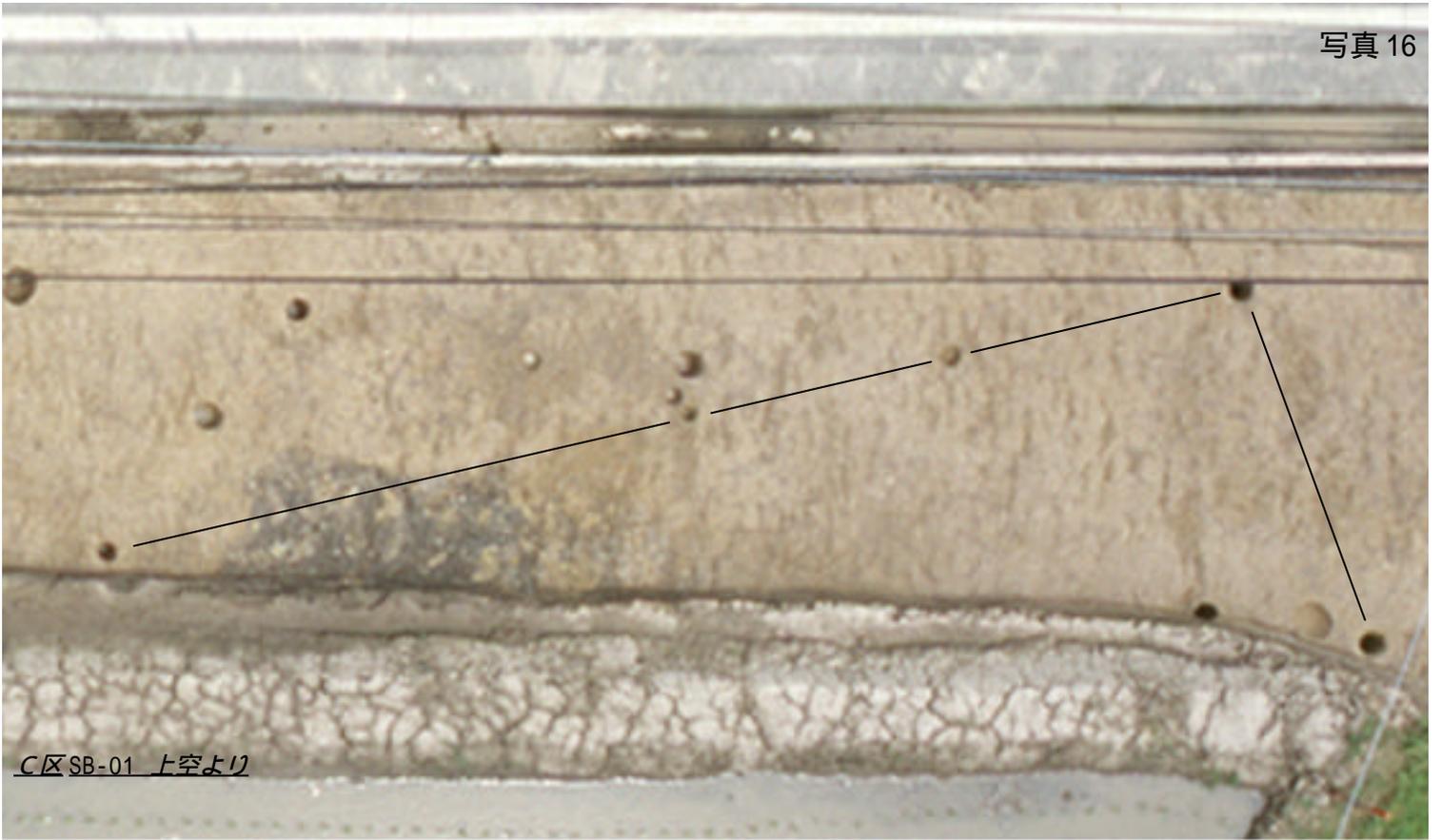
C区 SH-01 上空より



C区 SH-01 南より



C区 SH-01 北より



C区SB-01 上空より



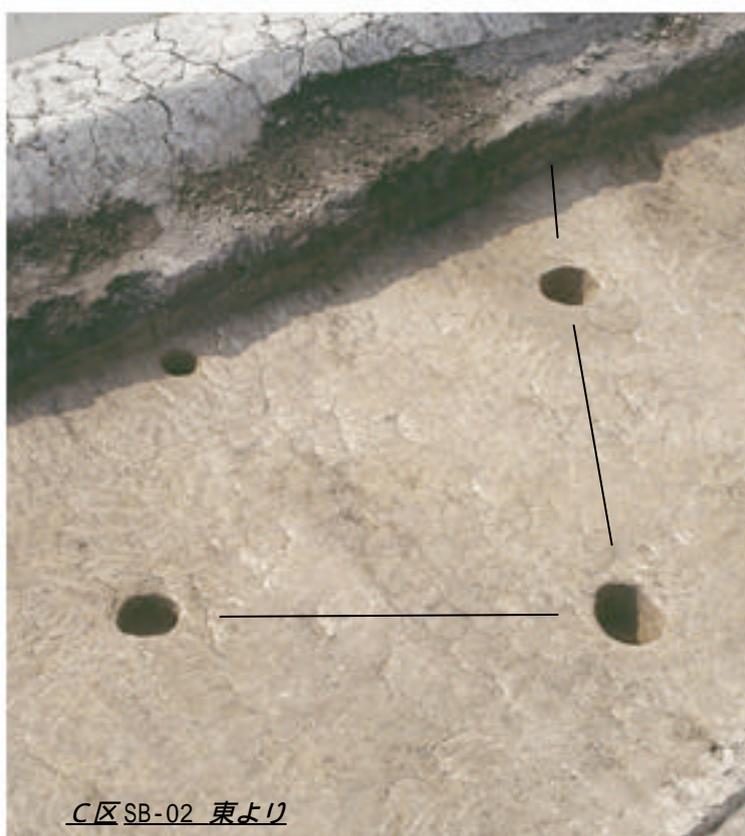
C区SB-01 南より



C区SB-02 上空より



C区SB-02 北より



C区SB-02 東より



S=1/4

1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

調査抄録

ふりがな	くるたに・おかのうえいせき							
書名	黒谷・岡ノ上遺跡							
副書名	県道小野藍本線歩道新設工事にかかる調査							
巻次								
シリーズ名	加東郡埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	29							
編著者名	森下大輔 久保田寿恵							
編集機関	加東郡教育委員会							
所在地	〒673-1463 兵庫県加東郡社町梶原358-1 TEL.0795(42)5830 FAX.0795(42)5830 Email.kato-bo@hyogo-c.ed.jp							
発行年月日	2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町番号	遺跡番号					
くるたに・おかのうえ 黒谷・岡ノ上遺跡	ひょうごけんかとうぐんとうじょうちょう 兵庫県加東郡東条町 くるたにあざおかのうえ 黒谷字岡ノ上	283436	T0-063	34° 55 10	135° 4 25	2002.06.04 06.09	440 m ²	歩道敷設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
黒谷・岡ノ上遺跡		弥生時代 室町時代	円形周溝墓 竪穴建物址 掘立柱建物址	壺				

編集・発行 2003(平成15)年2月28日

〒673-1463

兵庫県加東郡社町梶原358-1

加東郡教育委員会

印刷 吉本宝文堂(株)
